

元文四年刊

027
255
1

俳諧 瓜名月



029
255
1

專文知堂
第 11465 番
書圖

凡名月序

時雨も水の月ハ一瞬見不ありとやふる
室法のまぐらゆか秋う英が殊よ文ありば水旨
月の望ハ仙堂よ遊はれあア施敷寄り夏
う花の月見とす老て柳風園よ駕とゆし花家
そねも似合ひと萬秋う是やや亭主道守
みを廣ひ名門よひはまく春の臘の花
映一餅よ砂糖の耳味よ工せ千金よか一とせや

彼芋よ團子なむの月六唐士すも喰ふゆす
我用の要すも豆よ後ノ月見れさ到すあり
かすすやけ後ニヨヒの月見ハ伊達塗れ浴衣
をだくとも赤禪^{カツブリ}裸の時宣紙^{カツブリ}の服着
さすとキ蜜^{カツブリ}刀を用意^{カツブリ}風名月を乞
とあるれぞ歎す一月を承久無^{カツブリ}ぬ

享保十三年

申六月十五日

蘿^{カツブリ}忠^{カツブリ}主人



新秋仙

乙未

玉を産ひ鳩の浮葉や池の月

何て夙^{カツブリ}むくれ^{カツブリ}の連昇角

日幸ふも高麗^{カツブリ}を^{カツブリ}れ 篠^{カツブリ}宵北

キ紙の中^{カツブリ}り^{カツブリ}秋葉^{カツブリ}芭^{カツブリ}字

雪^{カツブリ}内庭障^{カツブリ}子あぐれ^{カツブリ}又寒^{カツブリ}一 茶秋

家うちてひと^{カツブリ}猫^{カツブリ}にく^{カツブリ}家 吾仲

ウ

法名もつりてす伊達形を以て
傘乃便りも芝居入でゆく
八朔は後輩の簾あそこ
牛のモドリよ蓑ヤスのやく焚く
新采窓相場つれてくまで自
娘あるつる智聰乃文盲
土用子より去年の苗本のまゝ残
ほゑたあ風を皆く風蘭

角 仲 秋 由 角 仲 秋 由 角

夕食候持荷乃寺へおーける
藤野ハ町も城も萬物キ
畠ノ花治原ハ駕籠を下りゝうて
づくづくとみかます
傳走トシテこれぞ空ぬねよニ鳥
鳴丸也へあこゝ高音
かく御す秋毛ちうる桔梗深
琴乃聲古弓人を詠ひす

北 享 秋 仲 角 由 北 享

雨あらえ歸り泉れ臺をくじ
佛^ハ侍^クすけ廻る拂陰日
菩提樹へ隣敷行燈乃鳴よまる
午房をかひて川てほひて
津の國には村々八月^ノ
えくひ^ト連と天ハてづね
傾城乃下放ハ時雨のぬれ^トて
紅自粉と^トす山茶花

久
敵^キよま^一あす氣^ハ有^リ望
見る内^ヘ暑^ヒ唐僧の鬚
今^の向^ユあり^トか^リ船^ノ景
朝^日の影^乃か^ミ山^ノ
蝶^鳥やう^テ背^テの花^も喰
春^モひ^ト人^タも^タ秋

角由北掌仲秋

即興

百川別号
昇角

うき草のせてありくや夏の月

西月乃吹すかづむや萎乃花 萎秋
はい浪よ垂む毛涼 一日の新 吉仲
勝士熟て蚊をぬすむ月具森 范家
月涼 苦れぬとんや座禪石 曾北



文通

月影を池に映してすこや

光士

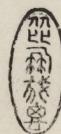
洛の八仙堂より名月を

感へく

此よりすすむ仙人達や池の月

苦心

後序



乙由支考等
一座のもの

むし伊陽の國の新百韻ハ神風館より機歎が書
て涼光と號を以て支考と横並今之乙由と其故
をつゝ一毛は地に齊の素紈うる軽く曲節ハ蜀の
錦錠すらぬまうて虚實継接の一巻となむる故り
世に集俳諺の源とひきりムア其後日引の妻化
ふ又新百韻のあくさくんや沙汰地の人しも
ひのてなきやせ梨本を乃が法のあらうのなかへ

能活の不自立うせよ麦芽の集塩のとのと思ひ
 あやまつねえれども予うハ僕精舍ニ雅菴を
 倉庫ト保謹かの賓客をとく矣きと化例の用茶
 を否がむて赤味噌を據て、金面^{イシイレ}と名詫^{イシイレ}
 を引て白茶^{シヤキリ}以降^{シヤキリ}も例のさしく例れ
 おりく心と世情の一節に亘りし滑稽傳
 乃人^{シヤキリ}すありなげ日ハ水無月半の四日あれ
 祖園會^{シヤキリ}鉦声^{シヤキリ}耳^{シヤキリ}より^{シヤキリ}納涼の歡喜^{シヤキリ}の喧^{シヤキリ}に

飽て額川^{シヤキリ}より耳^{シヤキリ}を洗ひ竹母^{シヤキリ}鼻^{シヤキリ}と拂^{シヤキリ}んと廣仄
 二月見とくえこの良恵^{シヤキリ}と此^{シヤキリ}名月^{シヤキリ}とハ名^{シヤキリ}は
 一輪東山^{シヤキリ}より西^{シヤキリ}桂^{シヤキリ}里^{シヤキリ}以降^{シヤキリ}を誰^{シヤキリ}ハ
 直城^{シヤキリ}内^{シヤキリ}羨簾^{シヤキリ}をとて今宵^{シヤキリ}月^{シヤキリ}を賞^{シヤキリ}ときやと
 おの^{シヤキリ}一盃^{シヤキリ}與^{シヤキリ}幸^{シヤキリ}俳諧^{シヤキリ}も秋^{シヤキリ}仙^{シヤキリ}冷^{シヤキリ}候^{シヤキリ}ぬ
 宗近^{シヤキリ}君園^{シヤキリ}や今^{シヤキリ}の俳諧^{シヤキリ}巧^{シヤキリ}にて變化^{シヤキリ}
 思^{シヤキリ}すて流れある事^{シヤキリ}地^{シヤキリ}華洛^{シヤキリ}乃羽^{シヤキリ}ニ重^{シヤキリ}を
 すくりて荷^{シヤキリ}ぬ^{シヤキリ}和國^{シヤキリ}乃產^{シヤキリ}を駆^{シヤキリ}す曲^{シヤキリ}鄭^{シヤキリ}上^{シヤキリ}伊^{シヤキリ}

乃袖と併て蜀錦の價とあらば化せし名毛
ハ駢毛自然の變化の変よして是をも洛の
新穎仙子のハ傳やマ森林主人の御子れ
仕アリ則梓よりちつまじふ事エラ

申
六月望

八倭散人書



追加

名目や池を失うりてどうもす

岩も形や爰小も肉の客むどり 去來

名目や豈りうへ月松乃影 其角

アノハ春農の萬里に傳
東西二華夫人様と教わ

らうほどの頗るるうはれ自乃の 蓮二

野山もつゝく豈りうへ月松の客 大艸

寂うふ曾ののめうをく後の日

涼光

芭蕉

やうて邊に山をまよひやまの日 麦林
金罡の馬を止歩行りの日 東棠
我の用意を乃が新月 あはれの自 岸虎
いささりやかくとむきに芋畠 曾呂
十の東を音抽一序欠より了 春波
そよぎれ本ハ何の日 如勇
裏しも希々房の浦の日 温故
七浦の網をかはくやる船の月 素道

名目や手取のハくとれ行不蛙千
名身や琴の雪舟よすの身 暫梅路
板の木にそよぎはくと月此寂中日 丹生
淀川乃とくと月此寂中日 合 横子
吹みくくふとまゆ寒後乃自 合
頭中高き影も出あひや後の日
名身やねむらしり居不入楚 甫遍
名身よ拭ふ雪舟 鏡子 何声

名月此花をかうなり唐 辛 里史
 幸壽乃閑とゆくや夕婦の日 己蝶
 かまくらの神をねむる後日月 東里
 兰秋とゆき頃より秋より後の日 如之
 人の所れやうれあるとあるとある日 洞也
 大佛や境もじぬきめ乃日 龜北
 屋根乃ちい遊ひかこえりやみの日 南利
 七夕よ見知りて雪やうれ名自 桃如

寒山子をく遊ふと候や後の日 畔吉
 菩提の處れ東博やまくわく
 奉ハカリにむにむ一月の日 素水
 十六日やまくは裏くは葛とゆ
 や今夜と歸くあと風や後の日 百童
 秋の色も皆拂ひてほり月 杜陵
 横り葉れかうそくめや後ノ日 八菊

此一卷之八傳坐此反故而中止了
紙多門州稿至勿多矣

板書了了之也

元文四年

己未霜月

神有

蘇東長老

書鋪

楊應治主

日

董履奇主

